Special interview

# 井形慶子さん、イギリスの小さな家は、なぜ居心地がいいのですか？

イギリスの平均的な家の延べ床面積は、15坪以下。
それなのに、日本の小さな家に比べてはるかに居心地がいいのはなぜなのか。イギリスの住宅やライフスタイルに関する著書を多数発表している作家の井形慶子さんにお話を伺いました。

コッツウォルズにあるチェルトナムという町の、タウンハウスの家並み。労働者階級のために建てられた、イギリスの典型的な15坪住宅です。玄関側は道路の境界線ギリギリに建て、裏側に小さなバックガーデンをとってあります。

小さな家しか買えない日本。だから、イギリスの小さな家のよさをもっと知ってほしい

——イギリスの小さな家に関する著書を日本でたくさん発表されていますが、その動機は何ですか？

**井形**　動機は大きく2つありました。ひとつは、イギリスの小さな家の魅力にとりつかれたということ。19才のときからイギリスに通いつづけているのですが、私が興味をもつ家というのは、タウンハウスと呼ばれる長屋だったんですね。イギリスには大きなマナーハウスやお城のような家もあるんですが、そういう家を見ても「大きすぎて落ち着かない」と感じる。でも、コテージハウスとかタウンハウスといった小さな家を見て回ったら、ものすごく居心地がよくって、かわいくてね。「あぁ、こんな家を建てたい」と思った。それがひとつめの理由です。

もうひとつには、かねてから日本の住宅事情を「ナンセンスだ」と感じていたということがあります。私のまわりの人は、20坪から30坪の家を建てるのに、「なぜ住宅メーカーは小さな家の展示場をつくらないんだろう」と思っていました。「人気の街は地価が高いから、狭い土地しか買えなかった」と、15坪の家に住んでいる人もいる。これからのファーストバイヤーは小さな家しか買えないんだから、ならば私が見てきたイギリスの小さな家を紹介しよう、と。しかも、調べてみたら、イギリスの80％近くの人が15坪前後の家に住んでいることがわかって、私が感じたことを本にまとめようと『小さなお金で夢がかなうイギリスの小さな家』（新潮社文庫）を書きました。

——この本の冒頭には、ご自身がバブル期に体験された家探しにまつわるエピソードが紹介されていますね。

**井形**　日本の住宅事情をつくってきたのは、やはり不動産業者だと思うんです。バブル期には、小さな土地だろうが家の機能をとにかく詰め込んで売ればいい、という考えの業者が横行していたんですよね。10年くらい、いろんな家を見ましたけど、日本の小さな家で「ここを買いたいな」と思うような家はなかったです。

むしろ、とんでもない家をたくさん見ましたよ。たとえば、駐車場が1階にあって、その奥に玄関があるという一戸建てなんですが、車を置いたらカニさん歩きをしても車にすりそうなんです。やっと玄関にたどり着いたら、今度はドアが車につかえてしまう。案内してくれた不動産屋の営業マンが「車をちょっと動かせば平気ですから」と言うんですが、普通の大きさの車だったら歩道にはみ出しそうな感じで。その営業マンに、「あなたがここに住んでみたら？」と言いたくなりました。



これが日本の狭小住宅の象徴で、無理やりつじつまを合わせて、すべての機能を全部、小さな家に詰め込もうとする。そこに工夫はなくて、「安くて、駐車場がついていればいいだろ」的な発想なんですね。

さっきもお話ししたとおり、イギリスの住宅事情も決して恵まれているわけではありません。映画「小さな恋のメロディ」の主人公たちも、ケン・ローチの映画に出てくる主人公も、みんな小さな家に住んでいるんですよね。でも、そういう家を「ウサギ小屋」とは呼ばない。むしろ、「この家を買いたい」と思うような家がいっぱいあります。イギリスの小さな家は、歴史あるアンティークと同じであたたかい。狭さが逆に居心地のよさになっていたりする。そうなると、家の大きさだけの問題ではないということになりますよね。

裏庭から建物側を見たところ。地面は石のスレートで舗装し、テーブルとチェアを置いて、"部屋"として使えるスペースになっています。土は見えませんが、建物にはわせたツル性植物と隣家との境界の生け垣、窓ぎわに植えたバラのおかげで、イングリッシュガーデンの雰囲気を十分に味わうことができます。

イギリスの小さな家は増築を重ねるから間取りが独特。共通しているのはキッチンに隣接する裏庭

——大きさの問題でないとしたら、日本の小さな家とイギリスの小さな家のいちばんの違いは何なのでしょうか？

**井形**　そもそもイギリスの小さな家は、小作人や工場労働者のためのもので、おふろもなくて、ひと間で家族全員が食事して、ゴロ寝してというところから始まっています。イギリスはご存じのように古いものを大事にしますから、そういう家におふろや部屋を建て増ししたりする。継ぎ足し住宅なんです。そこに味とおもしろさが出てくるというか、凹凸の家という印象なんですね。タウンハウスは、日本の公営住宅のように、形がある程度決まっていますけど、コテージハウスの場合は間取りがそれぞれ独特で、図面にもパターンがない。そこがおもしろいんですね。

それから、窓は2面採光というのがほとんどありません。プライバシーの問題もあって、窓は1方向にしかあいていない。だから、パーッと開けるような明るい部屋はないんですけれど、そのかわりに、たいていの家にはキッチンに面して4畳半くらいの裏庭があって、そこにはキッチンから出入りでき、食事をしたりできるようにテーブルが置いてあるんです。

日本では、駐車場をつくる関係で表側に庭をとることが多いけれど、プライバシーが守られる裏側に庭をつくるというのは、小さな家を居心地よくするポイントだと思いますね。しかも、裏庭に続くところにキッチンをもってきたほうが、絶対にいい。

イギリスの小さな家では、キッチンも3畳から4畳くらいと狭いのですが、必ず裏庭に面して窓をつけてあるので、とても開放感があります。それに、キッチンにはリビングよりも子供や家族が集まるという現象がありますよね。キッチンの隣に裏庭があれば、調理したものをいつもの食器によそって外のテーブルに運んで、アウトドアのダイニングのようにして使えます。イギリスでは、小さな家でも来客が多いのですが、「お客さまとどこで食事をするの？」と聞いたら、「裏庭のテーブルで」という答えが返ってきたこともありました。

——裏庭が、ひとつの部屋のように使われているんですね。

**井形**　こういった使えるスペースにするためには、裏庭を舗装するのがおすすめですね。ガーデニングブームもあって、植物が植わったお庭をつくりたいという要望もあると思うんですが、日当たりの悪い裏庭ではそもそも植物が育ちにくいし、地面がむき出しになっていると、絶対に雑草が生えてくるんです。だから、しっかりと地面をおおってしまって、植物はポットに植えたりして楽しむのがいいと思いますね。

それから、裏庭はしっかりと囲ってしまうことも大事です。プライバシーの問題もありますし、そこで食事をしたり、くつろいだりしたいのに、いちいち視線を気にしていたら落ち着かないですからね。

逆に表側の玄関回りは、あまり囲わないほうがいいと思います。イギリスでは、フロントガーデンの垣根は低かったり、なかったりするんです。日本のようにブロック塀などで高く囲ってしまうと、道幅がすごく狭く感じられるし、塀と建物の間は結局、デッドスペースになってしまう。それよりもむしろ、玄関側は少し地面を残して植物を植える。ちょっとした緑地帯のような感じで、見せるための庭の機能も果たせるし、道を歩く人にとっては開放感にもなります。フロント側はパブリックなものなんです。

リッチモンドにある、キャリア女性がひとり暮らしをしている小さな家。キッチンに続く裏庭には、やはりテーブルとチェアが。あたたかな天気のよい日には、友人や家族を招いてディナーを楽しむのだそう。

## 日本の家の間取りは廊下や押入れなどがネックに。ストックを持たない暮らし方ができるかどうかがポイント

——そのほかに、プランや構造の面で違う点はありますか？

**井形**　日本の住宅は、廊下と押入れにすごくスペースをとられています。特に押入れの問題は大きいですね。

実は、イギリスの小さな家を人々が堪能しているのは、イギリス人がストックを持たない生活をしているからなんです。日本人の場合、いっぱいものを持ってしまうから、結局、ものが家を占領しているんですよ。生活は変えないで、トイレットペーパーから洋服から客用布団までストックしておいて、20坪の家でかわいらしく暮らすというのには、やっぱり無理がある。

イギリス人は、お客さまを泊める場合は、毛布を渡してソファで寝てもらうとか、近くのB&Bに泊まってもらうとか徹底しています。日本のように年に数回の泊まり客のために布団をストックしたりしない。暮らし方自体から違いがあるんです。

いま、日本の平均的な核家族は3～4人くらいですよね。だったら、20坪くらいの家で十分暮らせる人数だと思います。なのに、なぜ狭いと感じるかというと、持ち物が多いってことだと思うんです。トラックで全部、ものを運び出したら、20坪の家は広いですよ。だから、持ち物をまずどうするかを考える。ものを買いたい人は、捨ててから買うなどのサイクルをつくらないとだめだと思います。

右→玄関を入るとすぐにリビングがあり、その奥に3畳ほどのキッチン、さらにその奥に明るいサンルームのようなダイニングという間取り。キッチンもダイニングも窓から裏庭が眺められます。

左←ロンドン郊外のリッチモンドにある、1890年代に建てられたコテージタイプのセミデタッチドハウス（2軒長屋）。玄関側にも小さな庭があり、低い生け垣で囲われています。

## 小さな家のインテリアにはあたたかい雰囲気が似合う。イギリスの小さな家の家具や鏡の使い方を参考にして

——イギリスはインテリア先進国ですが、小さな家のインテリアに何かポイントはあるのでしょうか。

**井形**　イギリスの小さな家のインテリアは、すごくあたたかみがありますね。イギリス人は家具を買い足していくという考えなので、ちっちゃなリビングに、ばらばらのデザインの椅子が並んでいたりする。それが、あたたかくて居心地のいい雰囲気をつくるんですね。日本の小さな家の場合、白壁にして、仕掛けのある家具をつけたりする例を見ますけど、あれはやめたほうがいいと思いますね。ジャングルジムのような子供用ベッドとか、天板を引き出して伸ばせるテーブルとか、狭さをなんとかする仕掛けのある家具っていうのは、めんどくさくて使わなくなるし、飽きるんです。

家具を買うのなら、あちこちでフレキシブルに使える小さめの家具がいいですよ。テーブルなら、2つ合わせると4人から6人がかけられるというものを用意するといいと思いますね。動かしやすい、どんなふうにでも使える家具を買って、状況に合わせて使う場所を変えたりしながら、長く使っていく。昔から使っている家具というのは、なんとなく自分でも気に入っているものだから、それを生かすことを考えたほうがいいと思います。

あと、イギリスでは、フォーカルポイントの暖炉の上などに、マンテル鏡という鏡を飾るんですね。絵のように額に入れた鏡を部屋のあちこちに置くと、部屋の中に適度な開放感が出るし、光が反射して明るさを感じさせる。この鏡は、ぜひ工夫してとり入れるといいと思いますね。それから、やっぱり照明には凝ったほうが、あたたかみが出ます。天井の照明1灯ですますのではなくて、小さな照明をいくつか使って、陰影をよりはっきりと出すようにすると、空間に広がりが出ますね。

84ページで紹介したお宅のキッチン。前の住人がつくったキッチンに、棚をつけるなど手を加えて改装している最中とか。裏庭からの光がたっぷりとさし込む、居心地のよい空間です。

## 飽きのこない家にするには、内装や部材の材質にこだわることも大事

**井形**　日本のいわゆる建て売りの小さな家のいちばんの欠点は、飽きることなんです。不具合ももちろん出てくるのですが、住んでいる人がつまんなくなるんですね、愛着がもてなくて。それは、結局、何もかもピラピラの、安い材質のものを使っているからなんです。インテリアに凝り始めたときに、絶対にインテリアと合わなくなってしまう。それこそ、何年も使いつづけた家具なんか似合いません。素材にそれを受け止める力がないんです。

だから、家を新築する場合には、内装や部材の材質にはこだわったほうがいいと思います。テラコッタや珪藻土、自然木でもいいですから、素材にはぜひこだわってほしい。それも1カ所だけにするんじゃなくて、何カ所かに素材感のあるものを使うといいと思います。そうすると、光がよりくっきりと素材を見せてくれますから。

## 生涯住みつづけられる、自分たちが好きな家を建てる。居心地のいい個の集合体となれるような間取りも考えて

――これから家を建てる人に、居心地のいい小さな家を建てるためのアドバイスをお願いします。

**井形**　この10年の間に、「狭くてもいいから、自分の好きな家を建てて住みたい」というファーストバイヤーがふえてきて、いい流れになってきていると思います。

まずは、自分たちがほんとうに好きな家を建てることでしょうね。「個性的な家を建てると、売るときに思うように売れない」と言う人もいますが、そんなことを考えていたら、結果的に魅力のない家になってしまいます。日本の場合は、イギリスと違って、一回、さら地に家を建てたら、そうそう住みかえをしないと思うんですよ。だから、売れるかどうかはあまり考える必要はない。生涯住めるように基本性能をきちんとさせて、飽きがこないように材質にもこだわって建てることが大事ではないでしょうか。

それから、大きな家と違って何もかも詰め込むことはできないから、まず自分の優先順位を紙に書き出してみることですね。「絶対に駐車場が必要」とか「庭がほしい」とかが上位にくるのであれば、リビングやキッチンは当然ながら狭くなってきますよね。じゃあ、全部いっしょのワンルームでいいかという発想になるわけです。それを「リビングを広くして、そこにソファを置いて」というイメージだけで考えていると、つじつまが合わなくなってくる。家づくりをフォルムから考えてはいけない、ということですね。私だったら、だれが使うかわからないリビングを広くするより、人が集まるキッチンを充実すべきだと考えます。それに、家族の個室をしっかりとることも大事ですね。

――なるべくリビングを広くして個室をなくして、という流れがいまの日本の住宅にはありますね。

**井形**　子どもが小さいうちはそれでいいかもしれないですけど、私のように子育てが終わってしまうと、家族それぞれの個室がすごく大事になってくる気がします。

みんな疲れて家に帰ってくるから、「家族だんらんなんてしんどい」と思うこともあるわけですよ。これからの時代は、家に精神的な逃げ場を求めると思うので、家族それぞれに個室が必要だと思いますね。

ファーストバイヤーの場合、まだお子さんが小さいでしょうけれど、いまの状態だけを見て間取りを考えてはいけないと言いたいですね。家族がいっしょにいる時間なんて15年くらいで、ほんとうに短い。子どもが成長するにつれ、親にも逃げ場が必要な時期がくるんです。思春期の子どもに対応するのは親だって疲れますし、受験期に入ると、家族のストレスも高まりますからね。じきに子どもが友達を連れてきてリビングを占領するようにもなる。そうなると、お父さんの居場所がなくなって、なかなか帰ってこなくなるということも、実際に起こりがちですからね。夫婦だって、結婚が長くなれば、それぞれの個室をもちたくなる。へたにリビングを広くするより、個室の数を確保したほうがいいというのはそういう理由からです。家は居心地のいい、個の集合体であるべきだと思うんです。

### Keiko Igata * profile

いがた・けいこ●作家。雑誌「ミスター・パートナー」編集長。大学在学中からインテリア雑誌の編集に携わり、世界100ヶ国に流通する外国人向け情報誌を創刊。28歳で出版社を設立し、英国の生活情報誌「ミスター・パートナー」を発刊する。90回を越える渡英経験を通し書き下ろした英国関連の著書は多数。『少ないお金で夢がかなうイギリスの小さな家』(新潮文庫)、『イギリス式節約お片付け～365日チープシックアイディア～』(宝島社)『老朽マンションの奇跡』(新潮社)など。近著「突撃！ロンドンに家を買う」(講談社)が話題に。

下↓リビングのコーナー。暖炉の上に飾ってあるのが「マンテル鏡」。部屋を広く見せるだけでなく、光をほどよく反射させる効果も。鏡に映っているのは玄関ドア。イギリスの小さな家には、玄関ドアをあけるとすぐリビングという、廊下のない間取りも多く見受けられます。

**好評発売中！**

**突撃！ロンドンに家を買う**
講談社
定価1500円(本体価格)

10代の頃より「いつかイギリスに暮らしたい」と願い続けていた井形さん。ついにその夢が現実のものに！ 本書では、様々な事件を乗り越え、家を手に入れていく様子が活き活きと描かれています。井形さんが手に入れたヴィクトリアン時代の小さな家とは……。日本の中古物件購入にも役立つ情報が満載。